

新潟県上越地方における2チーム分けジャンケンの かけ声の分布

Distribution of the Dialectal Variation in words for Janken to Divide People into Two Groups in Joetsu Region, Niigata Prefecture.

佐々木 香織*

要旨

新潟県上越地方の2チーム分けジャンケンのかけ声は、グーとパーの手型を使う「ぐーぱー系」のかけ声が回答の半数以上を占めた。そのうち最も多かったのは、「ぐっとぱーでわかれましょ」類のかけ声で、上越市市街地を中心に、上越地方各地に広く分布している。一方、中越、県央地区、下越北部で「ぐーぱー」系に次いで多く見られた、グーとチョキの手型を使う「ぐーちょき系」のかけ声は、上越地方ではほとんど使われていないことがわかった。また、新方言形と考えられる掌と手の甲を使う「うらおもて系」のかけ声は、回答全体の4分の1を占め、「うらうらうらうら うらおもて」以外にも「うーらおーもて あーえぱ」や「うらーて」など様々なバリエーションが見られた。「うらおもて系」のかけ声は、新潟県内では上越地方で最も普及していることが確認できた。

キーワード： 2チーム分けジャンケン 組み分けジャンケン 新方言 ウラオモテ 言語地図

0. はじめに

本稿は2015、2016年度に、新潟国際情報大学の日本語学受講生のアクティブラーニングの一環として行った新潟県内の中学校におけるジャンケンのかけ声の郵送アンケート調査のうち、上越地方（上越市、糸魚川市、妙高市）の結果を記述するものである。当時、調査にご協力いただけなかった学校で、2023年に協力いただけた学校のデータを加え、上越地方全域における2チーム分けジャンケンのかけ声の分布を明らかにする。なお、付録1に調査用紙見本を付した。

本調査では、普通のジャンケンのかけ声についても調査したが、新潟県内の他の地域と同様、「最初はグー じゃんけんぽん」または「最初はグー じゃんけんばい」という回答が圧倒的多数であった。一方、2チーム分けジャンケンについては、近隣学区でも分布に違いがあることから、本稿においても2チーム分けジャンケンのかけ声のみを扱うこととする。

これまで筆者は2014年から17年まで本学学生とともに下越、佐渡、中越地方の中学校でも同様の調査を行い、結果について記述、考察を行った。上越地方と隣接する中越地方では、下越地方と同様、「ぐーぱー系」のかけ声が最も広くいきわたっているが、中越地方の三条市、見附市、十日町市などでは、「ぐーちょき系」のかけ声が、「ぐーぱー系」を凌駕する学校もあり、特に中越地方の回答全体では約2割を占めていた。一方、上越地方では、「ぐーちょき系」のかけ声は

* SASAKI, Kaori [非常勤講師]

ほとんど見られず、浦川原中学校でのみ主流なかけ声であった。

また、新潟県全体の2チーム分けジャンケンのかけ声の新方言の中でも、より新しい語形と考えられる「うらおもて系」のかけ声が、中越地方では長岡市の周辺部で特に多く見られたが、全体の割合としては1割にも満たなかった。上越地方では、「うらおもて系」のかけ声は全体の4分の1程度を占め、新潟県内ではもっとも浸透していることが明らかになった。

なお、本稿では、国土地理院地図 Vector (試験公開) 版 (<https://maps.gsi.go.jp/vector/>) を利用し、上越地方の調査実施校の所在地を、小学校は三角形、中学校は四角形で示した。原則として調査は中学校(1年生対象)で実施したが、ご協力いただけなかった場合は、その中学校区内の小学校(6年生対象)で調査を実施した。調査実施校と各学校の在籍数、回答率などは付録2の表の通りである。

1. 先行研究

2チーム分けジャンケンのかけ声については、学術的な調査としては、筆者による一連の研究(佐々木 2012, 2017 等)以外、ほとんど行われていないが、一般の人々にとって、方言を身近に感じることができることもあり、マスメディアでよく取り上げられている(注1)。また、インターネットを使って調査を行い、その結果が掲載されているサイトも散見できる(注2)。

2チーム分けジャンケンは、普通のジャンケンに比べ、大人になってから行う機会が少なく、多くの場合、集団遊びをよくする小学生の頃に、最も頻繁に行うものと考えられる。これまで筆者による新潟県内の2チーム分けジャンケンのかけ声調査で、対象を原則中学校1年生にしたのは、このためであるが、調査を始めた2013年頃、筆者が新潟市在住の保護者世代の何人かに聞いたところ、「覚えていない」や「そのようなものはなかった」という人もいたことから、地域や年代によって、2チーム分けジャンケンの流入時期に差があることも伺える。実際、これまでの調査でも、「普通のジャンケンの勝ち負けでグループ分けをする」、「一列に並んで端から1, 2, 1, 2と番号を振って分ける」などの回答も見られた。こうした回答は、インターネット等による調査では、得ることは難しく、実態を正確には把握できない。

インターネット調査は、広い範囲で様々な年代の人からの回答を得られるというメリットがあり、また動画などで、実際の場面を表示できるという利点があるが、同じ市内でも、ごく一部の地域(特に小学校区)での珍しい言い方が「〇〇市」のかけ声として示されてしまうこともあるし、今の子どもたちの間ではほとんど使われていないものが含まれることもある。

2チーム分けジャンケンのかけ声は、学校の規模が比較的小さい場合、短期間で入れ替わることもあり得る。それは、2チーム分けジャンケンの使用場面が限られており、かけ声は、遊び仲間の中で使われる言葉であることから、メディア等による共通語化の影響もある一方で、個別化、独自化が進みやすいためである。また、同様の理由で、通用範囲が狭く、一つの市単位では、かけ声の分布状況を正確に把握することは難しい。

本研究は今後の研究のための基礎的な資料として、学術研究に資するよう、調査の条件を統制した上で、新潟県内の詳細な共時的な地理的分布を明らかにする。通時的な研究は別稿に譲る。

2. 上越地方の学校の状況と上越地方全体の2チーム分けジャンケンのかけ声

新潟県の学校基本調査(注3)によると、2015(平成27)年5月1日、新潟県全体の中学生の在籍数は約6万人だったが、2022年5月1日現在では、約5万3千人であり、前者を1とした時、

後者は88%と、人口減少が進んでいることが分かる。このうち、上越地方（糸魚川市、妙高市、上越市）の中学生の在籍数は、2015年は7,368人、2022年は6,263人であり、前者を1とした時、後者は約85%である。この間に統廃合された小学校もあり、調査校1校当たりの在籍数も、佐渡を除く下越、中越地方のそれより少ない。付録2の表からもわかるように、本調査実施校で1学年の在籍数が100人以上の比較的規模の大きい中学校は、糸魚川市では4校中、糸井川中のみ、妙高市では3校中、新井中学校（同校区内4小学校で調査）のみ、上越市では22校中、直江津中（学区内4小学校で調査）、直江津東中、春日中（学区内2小学校で調査）、城西中、城東中、城北中の6校で、調査校全体の1学年在籍数の平均は50人弱である。

上越地方全体（但し、付録2の調査校一覧のうち、飯小学校、南本町小学校、富岡小学校、大手町小学校のデータは、中学校と地域が重複するため、除外してある）の2チーム分けジャンケンの各かけ声の割合は、次の図1の通りで、「ぐーばー系」のかけ声が半数以上を占めている。次いで「うらおもて系」のかけ声が約25%を占めているが、「ぐーちょき系」のかけ声は、ごく少なく、そのほとんどが浦川原中学校の生徒からの回答である。

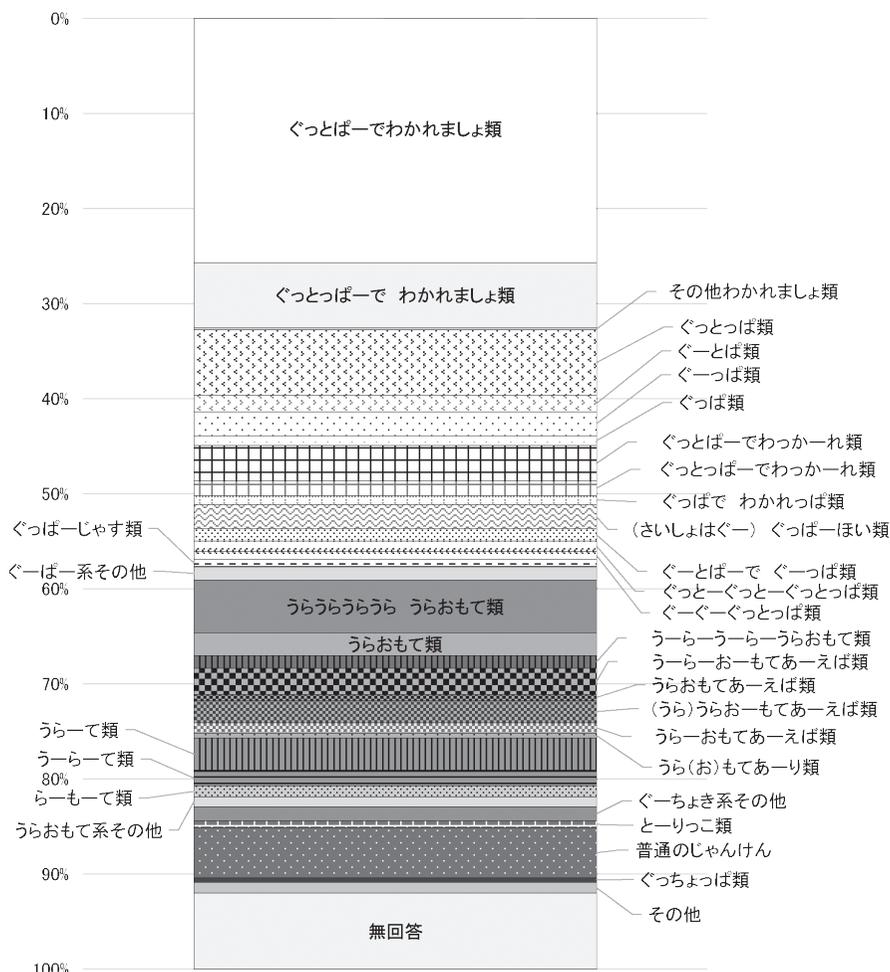


図1 上越地方の2チーム分けジャンケンのかけ声の各語形の割合

全体で最も回答が多かったのは「ぐっとばーでわかれましょ」類で、人口の多い上越市中心部を中心に約3割を占めている。上越市北東部では、これに似た「ぐっとばーでわかーれ」類が使われているが、南西部、糸魚川市では、「わかれましょ」以外の「ぐーばー系」のかけ声が多く使われている。一方、「うらおもて系」のかけ声は山間部の学校により多く見られるが、学校ごとに様々な語形が使われている。

以下、上越地方を5つの地域に分けて、各学校の2チーム分けジャンケンのかけ声を見ていく。

3. 各地域の2チーム分けジャンケンのかけ声

ここでは、上越地方を5つの地域に分け、それぞれの地図上に調査校を記し、その付近に各学校ごとの2チーム分けジャンケンのかけ声の割合を示す円グラフを配置した図を作成した。円グラフの大きさは、学校の規模に関係なく、だいたい同じ大きさにそろえた。また、その学区で使われるかけ声がどのようなものであるかを知る上では、複数回答も併せて集計したほうが、実態をより正確に反映できると考え、複数回答も1つとして数えている。平均すると一人当たり1.16語形回答してくれたことになるが、3語形以上回答してくれた生徒もいる一方で、無回答も全体の8%程度あった。

3-1. 上越地方の北西沿岸部のかけ声の分布

右の図2は、上越地方の日本海側で柏崎市寄りの地域の2チーム分けジャンケンのかけ声を中学校区ごとに円グラフにまとめたものである。中学校区ごとにみると、この地域内で、さらに、ほくほく線以北と以南、沿岸部と内陸部（高田地区寄り）のように区分できる。

実際の調査校の所在地と、調査校ごとのかけ声の割合を示す円グラフは図3の通りである。

最北東部の柿崎中学校区内の柿崎、下黒川、上下浜の3小学校及び隣接する大潟町中学校では「ぐっとばーでわかーれ」類のかけ声が主に使われていることがわかる。

しかし、北越急行ほくほく線を越えると、「ぐっとばーでわか

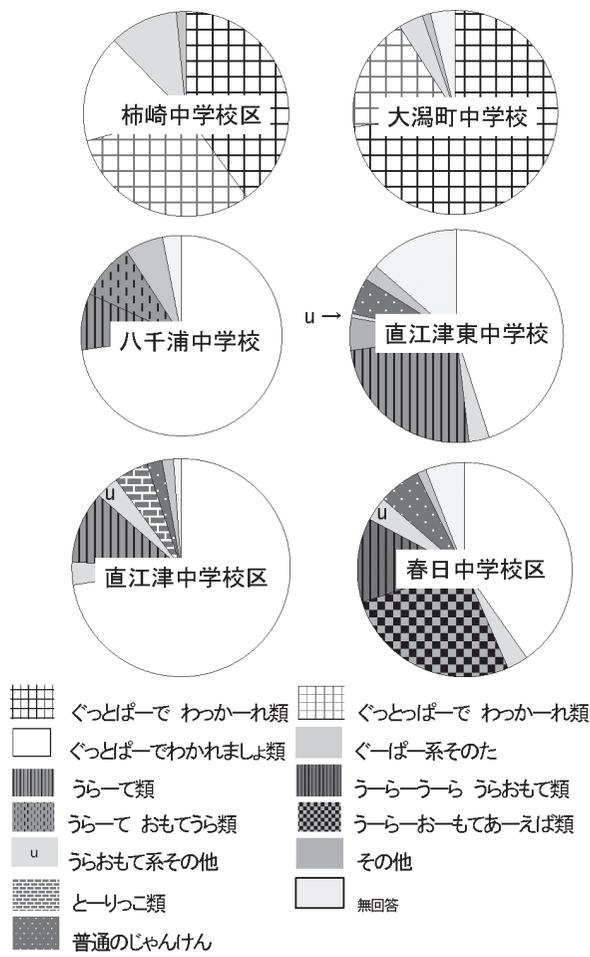


図2 上越地方の北西沿岸部中学校区別の2チーム分けジャンケンのかけ声

れましょ」類が優勢になる。

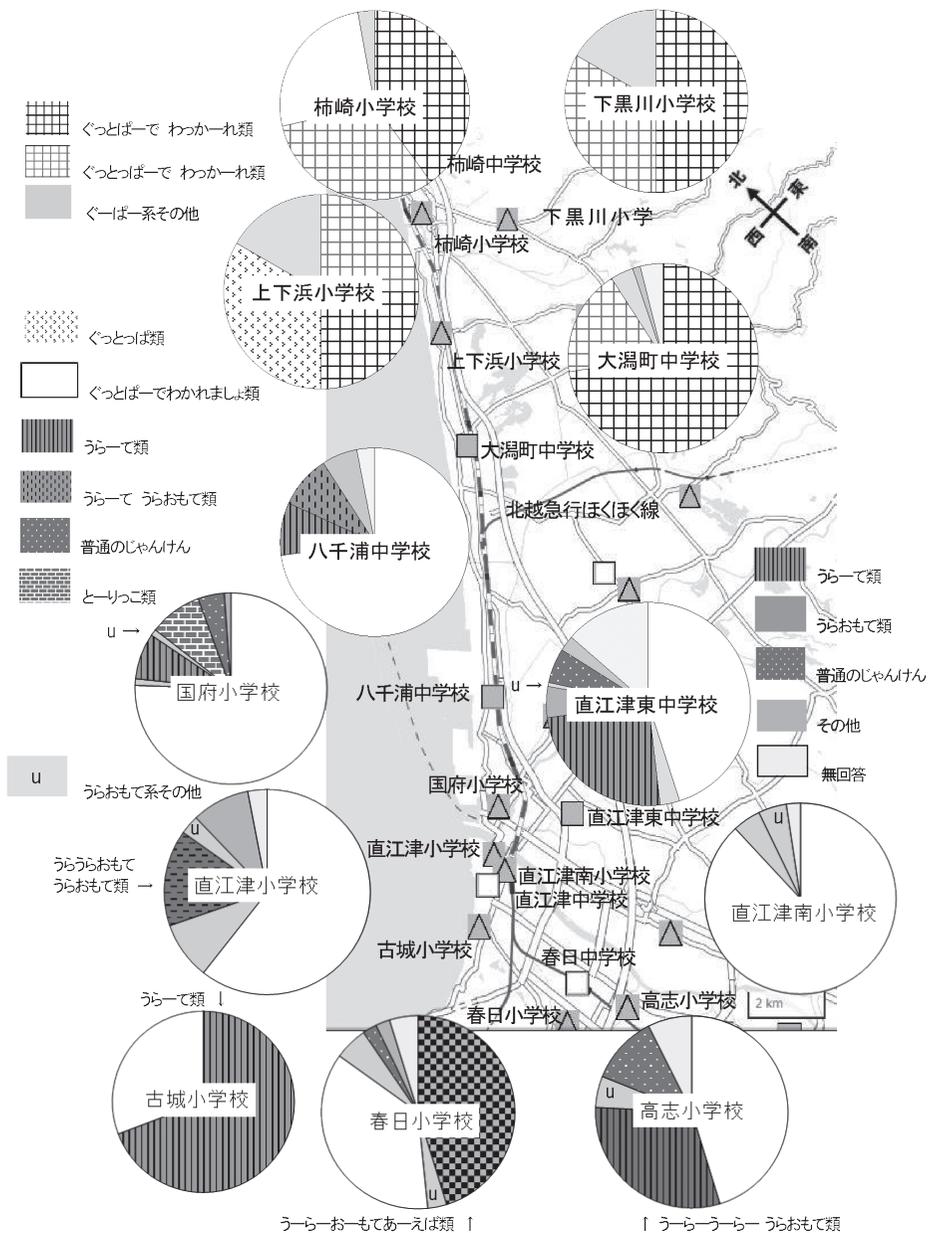


図3 上越地方の北東沿岸部のかけ声の分布図

八千浦中学校、直江津東中学校及び直江津中学校区内の4小学校のうち国府小、直江津小、直江津南小では、「ぐっとばーでわかれましょ」類が半数以上を占めている。「うらおもて系」のかけ声も若干見られる。直江津中学校区では古城小学校だけは、「うらーて」類が最多である。また、国府小には「とーりっこ」類が見られた。

一方、春日中学校区の春日小学校と高志小学校では、「ぐっとばーでわかれましょ」類と「う

らおもて系」のかけ声が拮抗している。前者は「うーらーおーもてあーえば」類が、後者は「うーらーうーら うらおもて」類が、「ぐっとばーでわかれましょ」類と並んで用いられていることが伺える。

3-2 上越地方の南西沿岸部のかけ声の分布

3-1の地域からさらに南西側の上越市、糸魚川市の日本海側の地域については、図4の通り、「ぐーばー系」が優勢だが、「ぐっとばーでわかれましょ」類が最多を占めるのは糸井川中学校だけで、糸魚川市の他中学校では「ぐっとば」類が最多である。また、潮陵中学校では「ぐっばーじゃす」類が、名立中学校では「ぐーっば」類がそれぞれ最多であった。図4で最北に位置する潮陵中は、図3の下端にある春日小学校から約7キロ離れているが、「うーらーおーもてあーえば」類も「ぐっとばーでわかれましょ」類と同程度見られる。名立中では「うらうらうらうら うらおもて」類を中心に、「うらおもて系」のかけ声も行われている。糸魚川市では、概して「ぐーばー系」4に対して「うらおもて系」1の割合で回答が寄せられている。学校ごとに様々な「うらおもて系」のかけ声が行われているようだ。

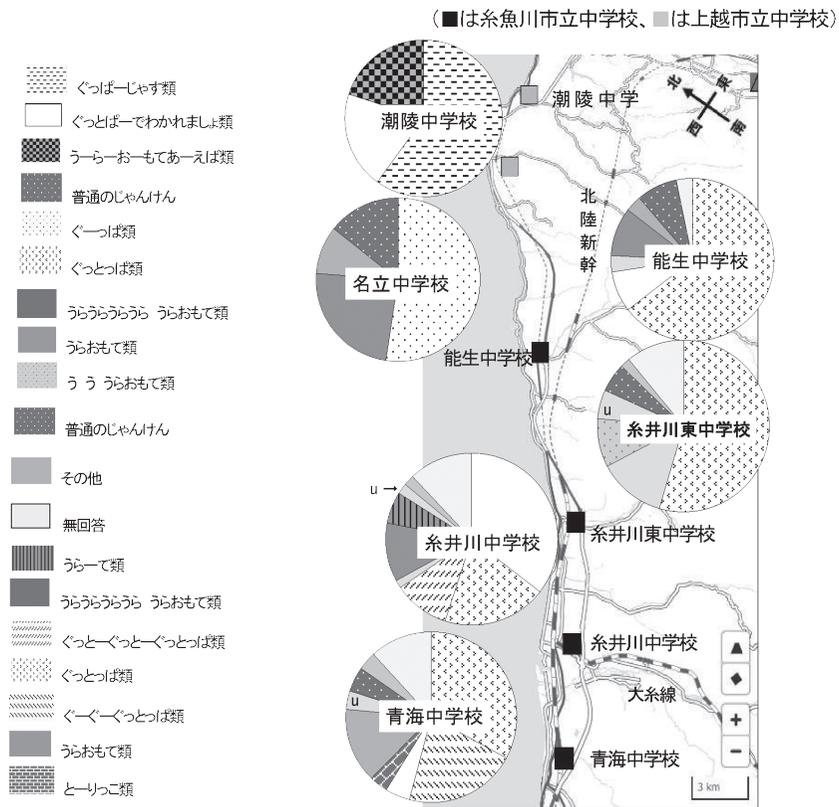


図4 上越地方の南西沿海部のかけ声の分布図

3-3 上越地方の東部内陸地域のかけ声の分布

次に、上越地方の内陸部、十日町市や津南町側の地域の2チーム分けジャンケンのかげ声の分

布を調査校ごとに図5にまとめた。この地図は下方へ行くほど標高が高くなっている。

図5の上方に位置する頸城中学校区は南川、大湊、明治の3小学校で調査を行った。南川小学校は、八千浦中や直江津東中のほうが、距離的には近く、「うらーて」類も見られるが、他の2小学校と同様、「ぐっとばーでわかれましょ」類が主流であることが分かる。したがって、頸城中学校区へのかけ声は、図6に示すように、北越急行ほくほく線以北の大潟町中学校等よりは、直江津東中や八千浦中に似た状況であることが伺える。

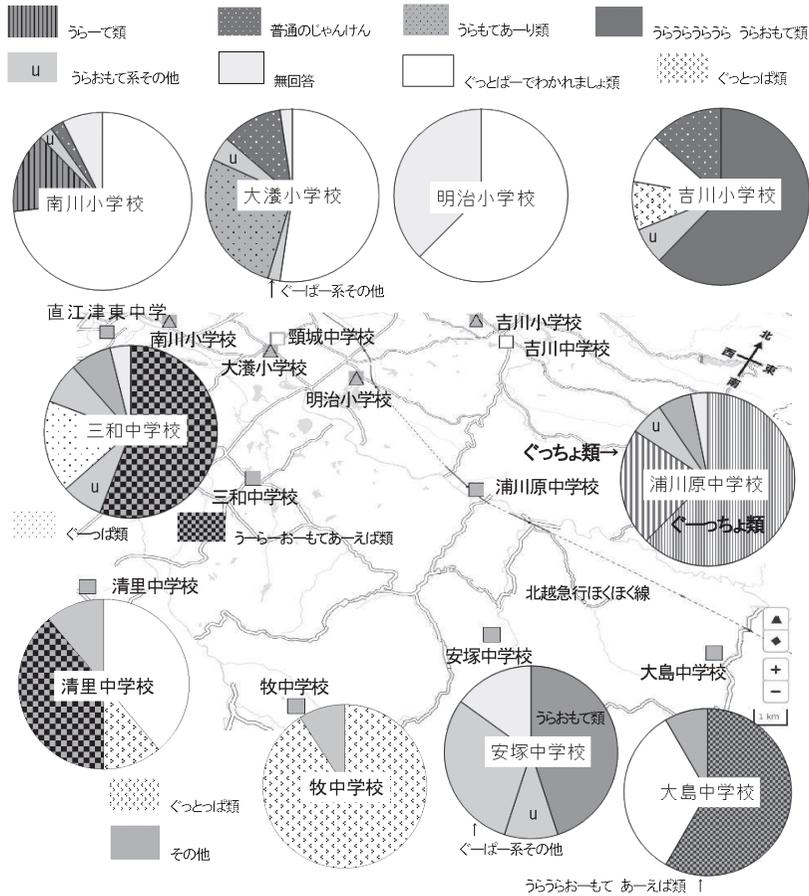


図5 上越地方の東部内陸地域のかけ声の分布図

一方、吉川小学校（吉川中学校区唯一の小学校）では、周辺のどの学校とも遠いこともあり、「ぐーばー系」かけ声が少数派で、6割以上「うらうらうらうら うらもて」類が占める。

三和中、清里中は、いずれも

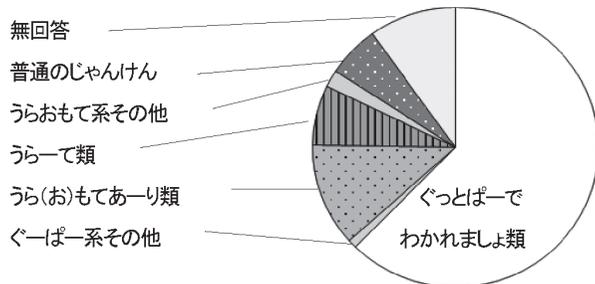


図6 頸城中学校区への2チーム分けジャンケンのかげ声

「うーらーおーもて あーえば」類のかけ声が多いが、清里中は「ぐっとばーでわかれましょ」類も同程度に多いことから、2つのかけ声が併用されていることが伺える。一方の三和中では、「ぐっとばーでわかれましょ」類がなく、「ぐーっば」類が多くなっている。

大島中、安塚中も、「うらおもて系」かけ声が半数を超えるが、前者が「うらうらおーもて あーえば」類、後者が「うらおもて」類が主なかけ声である。大島中では「ぐっとばーでわかれましょ」類も2番目に多く使われているが、安塚中では、「ぐーばー系」のかけ声は特に優勢のものは見られない。「うらおもて」類への統一がより進んでいることが伺える。

先述の通り、上越地方で唯一「ぐーちよき系」のかけ声が主に行われているのが、浦川原中学校である。かけ声は「ぐーっちょ」類あるいは、「ぐっちょ」類である。浦川原中は、北越急行ほくほく線の浦川原駅が最寄だが、この駅から4つ目（30分程度乗車）の十日町駅周辺の学校でも、「ぐーちよき系」のかけ声が行われているが、両者間にある大島中や十日町市立松代中、松之山中では、「ぐーちよき系」のかけ声は使われていない（佐々木2017、P22）ことを付言するにとどめる。

また、牧中学校は、「ぐっとっば」類がほとんどを占めており、この地域の他の中学校区と異なり、「うらおもて系」の回答はなかった。

この地域の学校は、中学校1学年の在籍数が、頸城中学校区を含めても約30人、同校を除くと約22人で、上越地方全体で、最も少人数の学校が多いエリアである。統廃合などで、一気に分布が変わることもあり、継続的な調査が望まれる。

3-4 上越地方の南部山間地域の2チーム分けジャンケンのかけ声の分布

ここでは主に妙高市における2チーム分けジャンケンのかけ声の分布を見ていくことになるが、同市に隣接する上越市立板倉中学校、中郷中学校についても併せて言及する。図7には同地域の地図と各調査校のかけ声を示した。

板倉中では、「ぐっばーほい」類が優勢で、「最初はグー」を付けるものと、そうでないものを合わせると9割弱を占めている。中郷中も7割近くが「ぐーっば」類を使うと答えており、「ぐーばー系その他」のかけ声と併せると、8割以上が「ぐーばー系」のかけ声を使っている。

一方、上越市板倉中と中郷中に挟まれている妙高市新井中学校区では、新井中央小以外では、「ぐーばー系」のかけ声が優勢だが、そのかけ声は、学校ごとに異なっている。新井北小では、「ぐーっばーでぐーっば」類が約7割、斐太北小では、「ぐーっば」類が約5割、新井小では、「ぐっとばーでわかれましょ」類が半分近くを占めるが、いずれも「うらうらうらうら うらおもて」類が3割ほど見られた。ただし、新井小学校は、調査年が2023年である点に注意が必要である。新井中学校区では唯一、新井中央小だけは、ぐーばー系のかけ声が様々で、「うらうらうらうら うらおもて」類が約8割を占めていることから、このかけ声がほぼ定着しているものと考えられる。

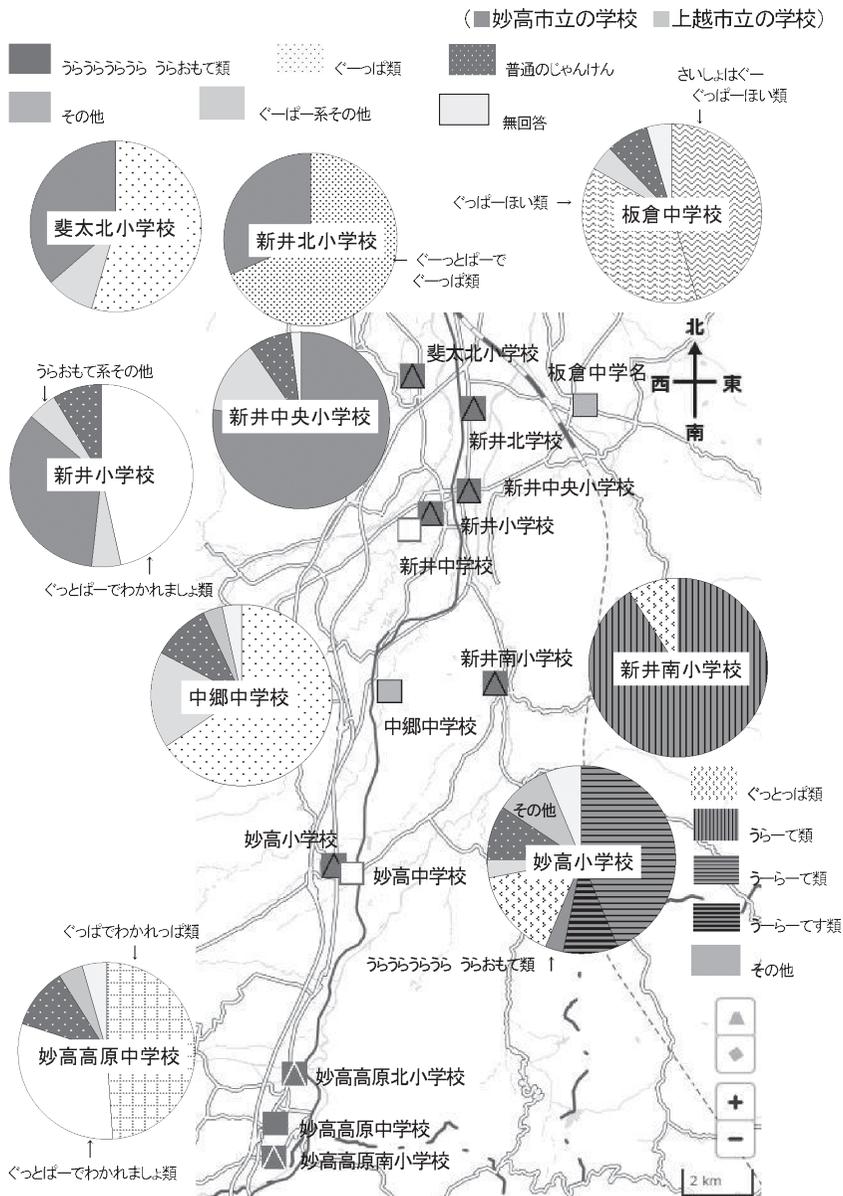


図7 上越地方の南部山間地域のかけ声の分布図

新井中学校区の南側にある妙高中学校区は、校区内2小学校、妙高小と新井南小の6年生を対象に調査を行った。新井南小は、距離的には上越市立中郷中学校に近く、最も妙高市新井中学校区側に寄っているが、使用されているかけ声はいずれとも全く異なっている。新井南小では、約9割が「うらーて」類を使い、残り約1割が「ぐっつぱ」類である。また同じ中学校区の妙高小では「うらーて」類が4割強で、「うらーてす」類、「うらうらうらうら うらおもて」類と併せて約半数が「うらおもて系」のかけ声を使っている。「ぐーぱ一系」で最も多いのは、「ぐっつぱ」類である。

妙高高原中学校は、「ぐっつぱで わかれましょ」類が半数近く、次いで「ぐっつぱーでわかれましょ」

類が3割程度となっている。同中学校区には南北2つの小学校があり、図8のように、それぞれの小学校出身者で、最も多く使われるかけ声が異なっている。なお、在籍数は妙高高原北小出身者24人で、同南小出身者(16人)より多い。

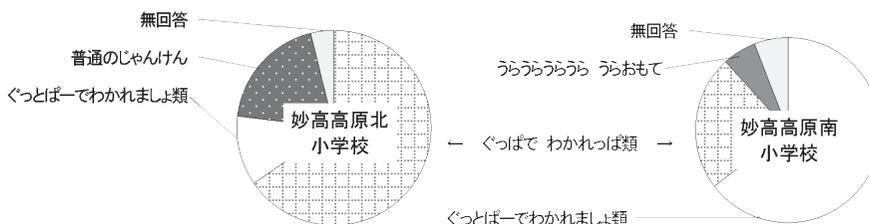


図8 妙高高原北小学校、妙高高原南小学校出身者の2チーム分けジャンケンのかけ声

3-5 上越市高田地区の2チーム分けジャンケンのかけ声

この地域は直江津地区と並んで、上越市の中心部とされる高田地区とはほぼ重なるエリアであり、最も多く、学校が集まっている。そして、同じ小学校区から、複数の中学校区へ進学する地域もあり、小学校区と中学校区の区割りが複雑になっている。図9では中学校の円グラフを小学校のそれよりも、少し大きめにしたが、回答者数とは関係ない。また、城北中学校、城東中学校の調査は、2023年に行い、他の小中学校では、2015、2016年に行った。

城北中学校区の飯小学校(2016年)では、「うーらーおーもせあーえば」、「らーもーせ」など、「て」が「せ」に変化した語形が見られた。一方、城北中学校(2023年調査)の飯小学校出身者の回答には、これらの語形は見られなかった。中学校に入学したことで、言い方を変えたのか、あるいは、7年の間に、これらのかけ声が廃れたのかは、不明である。城北中学校全体では、「ぐっとばーでわかれましょ」類が8割以上を占めていて、「うらおもて系」はごくわずかだった。城東中学校区ではあるが、富岡小学校は、城北中学校により近く、やはり「ぐっとばーでわかれましょ」類が約8割を占めている。また、城東中学校区の手町小学校の回答には、「ぐっとばーでわかれましょ」類が3割弱見られたが、「うらおもて系」が優勢で、「らーもーて」が全体の約4分の1を占める他、「うーらーおーもてあーえば」類とも言える「うらおもてあーえば」や「うらーおもてあーえば」など、微妙に異なる「あーえば」のつく語形が全体の3割を占める。

南本町小学校は城西中学校区だが、「とーりっこしょ」というかけ声がまとまって見られる点特徴的である。また、「うらおもてあーえば」が「うーらーおーもてあーえば」より優勢な点は、隣接する大手町小学校と共通している。城西中学校は学区が広く、6小学校区からなっている。最多回答は「普通のジャンケン」で、ほぼ同じ程度に「うーらーおーもてあーえば」類の回答があったが、どちらも2割に満たない。

同様の傾向は、雄志中学校でも見られる。無回答の23%を除くと、「うーらーおーもてあーえば」類が全体の18%で最多だが、ついで「ぐっとばーでわかれましょ」類が15%、「普通のじゃんけん」が13%であり、特に優勢と言える語形はなく、様々なかけ声が行われていることが伺える。

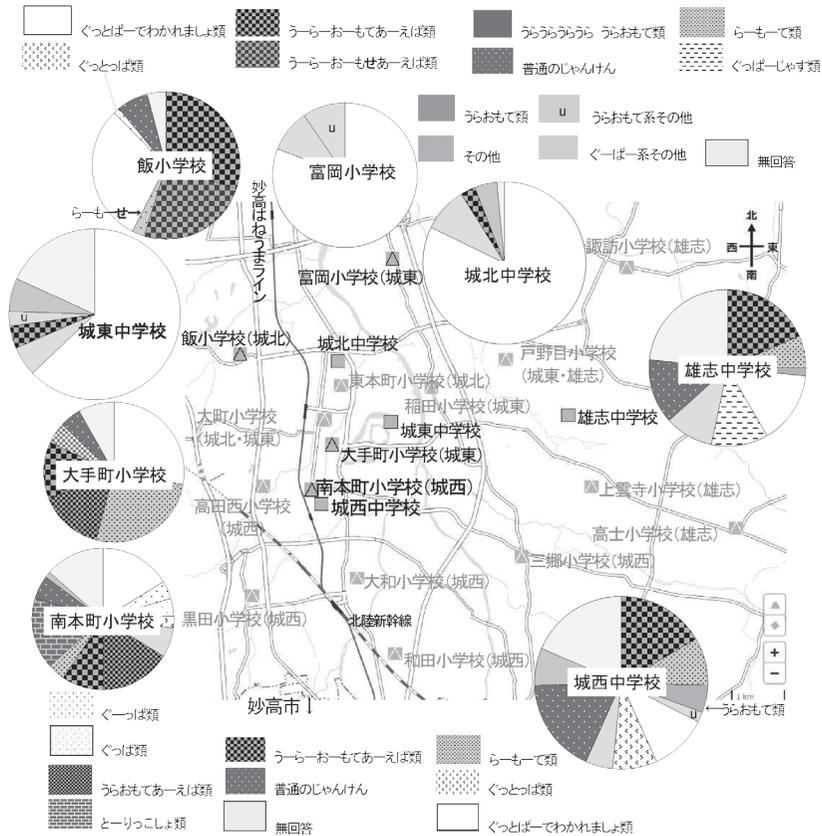


図9 上越市高田地区のかけ声の分布図

4. まとめ

以上、上越地方での2チーム分けジャンケンのかけ声調査の結果を記述した。普通のジャンケンのかけ声や、本人が使わないが、聞いたことがあるかけ声などについても、様々な情報を得ることができた。例えば、妙高市新井中学校区内の小学校からは、「普通のジャンケンのあいこのときに、『あいこでしょ しっしのほい』と言う」との回答が多数寄せられた。また、インターネット動画などで聞き覚えたかけ声なども、いくつか寄せられたが、本稿では言及する紙幅がなく、割愛せざるを得ない。

本稿では、便宜上5つの地域に分けて、2チーム分けジャンケンのかけ声の分布を表示したものの、これらの地域ごとの特徴というよりは、やはり学区ごとの特徴のほうが際立っていると言える。2チーム分けジャンケンという、遊びの言葉の性質上、そのかけ声のバリエーションが多様であることは、周知の通りだが、上越市の中心部のように、同じ学校内でも主流のかけ声の一つに定まらないケースもあり得ることが、明らかになった。多くの場合、各学校に半数以上の回答を占める主流のかけ声があり、それが隣接学区であっても、あるいは、隣接学区だからこそ、異なるかけ声が生まれたり、新たに採用されたりするのだろうとの見通しをもとに、学校ごとに調査を行ってきた。しかし、子どもの社会でも、集団遊び自体があまり行われなくなるなど、長期的な傾向がある中で、さらに遊びの集団規模が小さくなっているとすると、今後は、学校単位では「その他」にまとめられてしまうかけ声が増えていくかもしれない。

実際、例えば「ぐっとばーでわかれましょ」だけ見ても、「ぐーとばーで」、「ぐっとっばーで」、「わっかれましょ」「わっかれーましょー」など、長音や促音の添加や脱落のバリエーションが多く、表記の揺れなのか、実際はどうか、また、どのような音調なのか、郵送による筆記調査では、十分知ることはできなかった。今後は、動画などの資料も積極的に活用する必要があるだろう。

個人の言葉の選択には、共通語化に向かうものと、グループ内の結束を高めるための仲間言葉の独自性を優先するものの、両方向の指向性が関わっていると考えられるが、2チーム分けジャンケンのかけ声の選択にも、それが現れているようである。本稿で行えなかった詳細な分析や考察は、別の機会に譲る。

2015、2016年の郵送調査から、すでに7、8年が過ぎてしまい、この間、コロナ禍によって地域での子どもの遊びにも変化があったことが予想される。また、全国的に地方での人口減少、少子化の進展による学校の統廃合によって、通学区が広がるなど、子どもをとりまく環境も変化している。これらが、2チーム分けジャンケンのかけ声に、どのような影響を及ぼすのか、あるいは、及ぼさないのかについては、2チーム分けジャンケンのかけ声の通時的な研究とともに、今後の課題としたい。

5. おわりに

最後に、これまで本調査にご協力いただいた新潟県内の全ての学校の関係者の皆様に、心から御礼を申し上げたい。特に、上越地方の全中学校区を網羅することができたのは、今年11月に、急きよ調査をお願いした上越市城北中学校、城東中学校、妙高市新井小学校の関係者の皆様が、ご多忙の中、快く調査にご協力くださった結果である。ここに深甚の謝意を表したい。また、アクティブラーニングの一環とはいえ、実際に郵送料を負担したり、学校との連絡に尽力してくださった当時の本学学生にも遅ればせながら、ここに感謝申し上げる。

付録1 調査用紙見本

新潟県のじゃんけんのかけ声について調べています。皆さんが学校で友だちとじゃんけんするときのかけ声を教えてください。答えたくない質問には答えなくていいです。

1. 普通のじゃんけんのかけ声を教えてください。最初から省略しないで書いてください。

例：さいしよはぐー、じゃんけんばい

2. 2つのチームに分かれるときのかけ声を教えてください。最初から省略しないで、書いてください。

例1：ぐーばーじゃんけんぐっとっび 例2：普通のじゃんけんの勝ち負けで分ける など

3. 出身小学校を教えてください。(中学校ではありません。) _____市立 _____小学校

4. 自分と違う言い方のじゃんけんを聞いたことがあったら、教えてください。

どんなかけ声でしたか？ _____

それは普通のじゃんけん・2チームわけじゃんけんのどちらですか？(○をつけてください)

いつごろ聞きましたか？ _____ 市 _____ 区・町・村

何才くらいの人が言っていましたか？○をつけてください。 _____ 年下・同年代・先輩・大人・老人

ありがとうございました。

新潟国際情報大学 (日本語学担当 非常勤講師)

佐々木香織

literakoya_niigata@yahoo.co.jp

(但し、小学校用の調査用紙では、3の質問は省略した。)

付録2 調査実施校一覧

市	調査実施学校名	実施年	在籍数	回答者数	回答数	回答率
糸魚川市	能生中学校	2016	63	51	62	81
	糸魚川東中学校	2015	51	49	55	96
	糸魚川中学校	2015	181	168	200	93
	青海中学校	2015	67	65	85	97
妙高市	斐太北小学校（新井中学校区）	2016	17	15	22	88
	新井北小学校（新井中学校区）	2016	31	31	38	100
	新井中央小学校（新井中学校区）	2016	52	48	52	92
	新井小学校（新井中学校区）	2023	56	47	58	84
	新井南小学校（妙高中学校区）	2016	10	10	11	100
	妙高小学校（妙高中学校区）	2016	25	23	32	92
	妙高高原中学校	2015	42	42	45	100
上越市	下黒川小学校（柿崎中学区）	2016	16	17	18	106
	柿崎小学校（柿崎中学区）	2016	34	34	35	100
	上下浜小学校（柿崎中学区）	2016	16	12	12	75
	大潟町中学校	2015	78	76	77	97
	八千浦中学校	2015	28	28	33	100
	直江津東中学校	2015	153	148	162	97
	国府小学校（直江津中学区）	2016	28	28	33	100
	古城小学校（直江津中学区）	2016	10	9	13	90
	直江津小学校（直江津中学区）	2016	25	25	33	100
	直江津南小学校（直江津中学区）	2016	47	42	42	89
	高志小学校（春日中学区）	2016	90	86	95	96
	春日小学校（春日中学区）	2016	115	114	126	99
	潮陵中学校	2015	5	5	5	100
	名立中学校	2015	11	11	21	100
	大湊小学校（頸城中学区）	2016	33	32	44	97
	南川小学校（頸城中学区）	2016	40	40	41	100
	明治小学校（頸城中学区）	2016	17	16	16	94
	吉川小学校（吉川中学校区）	2015	36	32	45	89
	清里中学校	2015	13	13	18	100
	三和中学校	2015	43	36	52	84
	浦川原中学校	2015	29	27	32	93
	牧中学校	2015	11	11	11	100
	安塚中学校	2015	14	14	20	100
	大島中学校	2015	10	10	12	100
	城東中学校	2023	165	137	143	83
	大手町小学校（城東中学区）	2016	55	50	61	91
	富岡小学校（城東中学区）	2016	16	18	21	113
	城西中学校	2015	155	140	157	90
	南本町小学校（城西中学区）	2016	65	60	74	92
	城北中学校	2023	158	128	135	81
	飯小学校（城北中学校区）	2016	58	57	73	98
	雄志中学校	2015	58	53	60	91
	中郷中学校	2015	29	29	29	100
	板倉中学校	2015	65	63	66	97
	合計		2321	2150	2475	93

注1 例えば、2023年5月20日新潟日報おとなプラスには「チーム分けじゃんけん ローカル かけ声の謎」（報道部平賀貴子）という特集が生まれ、筆者も取材を受け、ウェブサイト（<https://www.niigata-nippo.co.jp/articles/-/214093>）にも記事が掲載されている。また、西日本新聞では、2023年7月6日に「チーム分けの謎深し」（<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/1104749/>）という記事が見られる。

さらに、テレビでも、Eテレ「0655」という番組内で、2022年8月最終週から、「ゲーパー調査」（作詞：貝塚智子、作曲：近藤研二）という歌が放送されたことが、Eテレ0655「これまでのおはようソングとコンテンツ」<https://www.nhk.jp/p/e0655/ts/5ZZY183L7P/>

blog/bl/pB7Kw0d01B/?pastOffset=15 からわかる。また、北陸放送では、夕方のニュース番組「Nスタ」で、2023年8月14日に「『グーパー』に『グーキーグーキー』子ども同士でのチーム分けの掛け声に地域差が…あなたの故郷では？」(<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/661939?display=1>)と題して、石川県内の2チーム分けジャンケンが紹介されており、同月18日には、系列のTBSテレビの「Nスタ」全国版でも、「『グーキーグーキーオトモイエス』『グーバグッバグッパーシ』『グッパージャス』なぜ？チーム分けの掛け声『グーとパーでわかれましょ』に地域差が！」(<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/671122?display=1>)と題して、全国各地のかけ声が紹介されている。

なお、各ウェブサイトのURLは、2023年12月1日現在のものである。

注2 例えば、2020年5月5日に掲載されたJタウンネットの「グーとパーでチームを分ける『アレ』全国に50パターン以上の掛け声が存在することが判明」(横田 絢) (<https://j-town.net/2020/05/05304692.html?p=all>)では、読者に各種SNS投稿での情報提供をよびかけている。また、個人のウェブサイト「どっちの神様」(<http://docchi.fan.coocan.jp/index.html>)で、同サイトを主宰する田中千晶氏がアンケートを年ごとにまとめて、結果を公表している。2チーム分けジャンケンについては、県別のかけ声の一覧が掲載されている。(<http://docchi.fan.coocan.jp/mainframe.htm>)

注3 <https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/tokei/1356835480718.html> に掲載の平成27(2015)年の「第8表 学校数、学級数及び生徒数」及び、

<https://www.pref.niigata.lg.jp/site/tokei/gakkoukihon-kaku2023.html> 令和4年度学校基本統計速報(学校基本調査の結果速報)「1学校数、児童・生徒数」による。

参考文献

- 佐々木香織(2017)「新潟県中越地方における2チーム分けジャンケンのかけ声」(2017年3月『新潟国際情報大学国際学部 紀要 第2号』pp.13-26)
- 佐々木香織(2012)「新潟県における2チーム分けジャンケンの掛け声の分布」(2012年3月『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要15号』pp.15-24)